

〈教育ノート〉

# 保育者養成校における 「『アート表現』の指導法」の学びについての一考察

——地域連携行事「子どものためのアートワークショップ」での実践——

宇津木 七 実\*

A Consideration on Learning of  
“Methods for Teaching Art Expressions” at a Nursery College  
——Practice at a Local Event of “Art Workshop for Children”——

Nanami Utsugi

## I、問題の所在

都市化、核家族化、少子化、子どもの遊び環境の変化等が顕著となった近年の社会状況においては、若者が乳児や幼児と身近にふれあう機会が極めて少なくなっている。子どもに関連する教養科目の受講生を対象とした矢野<sup>1)</sup>の調査研究では、子どもは好きで子どもと遊ぶことも嫌いではないが、子どもと遊ぶことには自信がないという、子どもの対応に不安をもつ学生像が提示されている。著者の所属する短期大学保育学科においても、入学以前に子どもとふれあう機会がなく、乳幼児の生活や遊ぶ姿に具体的なイメージがもてないという学生は少なくない。一方、一般社団法人保育教諭養成課程研究会が示した教職課程コアカリキュラム<sup>2)</sup>における「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」の目標には、「幼児の発達に則して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける」ことが挙げられ、幼児の発達や心情等を理解するために、映像資料等を活用することも推奨されている。しかし、保育者との関わり方によって子どもの反応が変わったり、場面によって子どもの発話やつぶやき、表情やしぐさの意味が違ったりすることがあり、実際の子どもの姿をイメージするには、特定の映像資料等から学ぶだけでは充分ではないと思われる。長沼と佐藤による大学生を対象とした研究<sup>3)</sup>では、学生の短期間の保育園実習体験が、子どもに対するイメージをより具体的に变化させ、学習意欲を向上させるための動機付けとなったとある。短期大学生は、限られ

た期間内に、保育者として必要とされる資質・能力を身に付ける必要がある。短期大学生が養成期間内に、子どもに対するイメージを具体的にもち、指導計画に活かす力を身につけるためには、教科としての教育・保育実習以外の時間においても、子どもと関わる体験を重ねることが重要である。

著者の所属する保育学科では、大学独自の地域連携行事「子どものためのアートワークショップ（以下アートワークショップ）」を、地域の子どもたちを対象として、毎年開催してきた。この地域連携行事は、元々は学科行事である保育フェスタ造形作品展（以下「保育フェスタ」）という形で、造形表現に関連する授業の成果発表（学生の作品展示）会であったが、現在では授業の一環として位置付けられている。1年生における必修授業である「基礎演習Ⅱ」では、「アートワークショップ」で、子どもがかいたり、つくったり、絵本や紙芝居を楽しむ「アート表現」の場を提供するための計画、準備、また実施当日の指導、後片付けを、学生が主体となって行っている。造形の授業を担当する著者としては、「アートワークショップ」で幼児の表現に触れるだけでなく、2018年発行の『幼稚園教育要領解説』<sup>4)</sup>の領域「表現」における内容の取扱いの解説文にある、「はっきりとした表現としては受け止められない幼児の言葉や行為でさえも、教師はそれを表現として受け止め共感することにより、幼児は様々な表現を楽しむことが出来るようになっていく」ことを、学生が体験的に理解することも期待している。

本研究の目的は、授業の一環である地域連携行事に参

受付日 2021. 5. 21 / 掲載決定日 2021. 7. 2

\*関西女子短期大学 准教授

加し、直接子どもと関わった学生の感想を分析することにより、幼児の「アート表現」やその指導法について、学生がどのようなことに気づき、学んだかを明らかにすることである。

## Ⅱ、用語の定義

2017 年告示の『幼稚園教育要領』<sup>5)</sup>の、感性与表現に関する領域「表現」のねらいには、この領域において幼児期に育みたい資質・能力として、幼児の生活する姿から捉えた心情、意欲、態度を

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ

と示している。

本研究において使用する「アート表現」には、かいたり、つくったりして表現することに加え、絵本や紙芝居を見て楽しむことも含んでいる。幼児は、保育者や保護者から絵本や紙芝居を読み聞かせしてもらうことで、美しい言葉や物語、絵の表現を感受し、豊かな感性を育むことは、上記ねらいの (1) にあたると考えられる。このため、「アートワークショップ」での描く活動や工作に加えミニシアターでの読み聞かせも、子どもの表現を育む教育活動と捉えている。なお身体表現、音楽表現と区別するため、本論では「アート表現」という言葉を使用し、造形活動での表現に限定する文章では造形表現という言葉を用いることにした。

## Ⅲ、「アートワークショップ」について

### 1、行事の概要

2012 年中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」<sup>6)</sup>では、将来の予測が困難な時代背景の下、大学における教育においては、学生自らが問題を見出し、解決するための能力を身に付けるといった教育方法の質的な転換が必要であることが説かれている。それまでのような、教員から学生への知識伝達の形から、教員と学生によるディスカッションやディベート等の双方向の能動的な学修形態（アクティブ・ラーニング）へと転換させる必要のあることが提案されている。また、2015 年の「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」<sup>7)</sup>の答申を受け、2016 年には、大学等でより質の高い教職課程を創意工夫し編成できるように、教育職員免許法および同法施行

規則の一部改正がなされた。さらに、新しい学習指導要領等が告示された 2017 年には、幼児教育の質の向上を目指して、『幼稚園教育要領』等も改訂された。保育者養成校においては、コアカリキュラムに示された教育内容を修得するだけでなく、地域や学校現場でのニーズに対応した教育内容や大学の自主性や独自性を発揮した教育内容を取り入れて、学生の資質能力を向上させることが必要であるとされている。このような背景の下において、本学科においても、カリキュラム編成、シラバスの見直し等が行われ、同時に、これまで大学で実施されていた行事を、学校の自主性・独自性に基づいて、保育者を目指す学生にとってより深い学びに繋がる機会となるように改善した。

本研究のフィールドとなる「アートワークショップ」は、学生が地域や短期大学と同じ敷地内にある附属幼稚園の子どもたちとふれあうことができる機会となっている（表 1）。学科行事である保育フェスタ造形作品展は、2009 年から 2011 年の 3 年間は、造形表現に関連する授業の成果発表（学生の作品展示）会であった。著者が初めて担当した第 4 回（2012 年）保育フェスタ造形作品展からは、「アートワークショップ」を同時開催することになった。当初は「アートワークショップ」の内容企画は著者が行い、ボランティア学生が手伝う形で実施した。しかし参加した子どもが 24 人と少なく、41 人の参加学生が十分に子どもと関わる体験ができたとはいえないものであった。このため、「アートワークショップ」を学生の学びの機会にするためには集客が必要であると考え、市広報への行事内容の掲載、市内の幼稚園、保育所等への案内配布などを通して、地域に向けて広く参加を呼び掛けた。その結果、子どもの参加人数は徐々に増加してきた。また参加学生も、当初は著者が担当するゼミ学生が中心であったが、保育学科の学生全員に対してボランティア募集を行い、意欲のある学生が参加できるようになった。さらに教員主導で決めていた活動内容を、学生の企画や意見等を取り入れ、出来るだけ学生主体となるワークショップに改善していった。

この活動に参加したボランティア学生からの事後報告には、「子どもがかわいい」「附属幼稚園観察実習で接したクラスの子どもに、再会でできてうれしかった」という、子どもと関わった喜びの感想だけでなく、かいたり、つくったりしている子どもの姿を興味深く観察したことがわかる内容の記載もあった。授業では得られない体験が出来ていることが視られるこれらの学生の感想報告の内容を、全教員で検討した結果、第 8 回（2018 年）からは、ゼミ教育科目である「基礎演習Ⅱ」の授業として、「アートワークショップ」に 1 年生全員が参加する

表1 保育フェスタ造形作品展と「子どものためのアートワークショップ」の参加者とその実施内容

開催回 年度	保育フェスタ全体の参加者数 (来場者数には子ども数も含む)	アートワークショップに参加した 学生の学年、人数、参加目的	アートワークショップ内容
第4回 2012年	学生 141 来場者 80 子ども 24	1、2年生 41 ボランティア	・親子での毛糸で作る工作 ・ミニシアター
第5回 2013年	学生 176 来場者 72 子ども 25	1、2年生 54 ボランティア	・親子でのリサイクル工作 ・工作、折り紙、お絵描き ・ミニシアター
第6回 2014年	学生 196 来場者 39 子ども 12	1、2年生 70 ボランティア	・工事前パネルにペインティング ・工作（おもちゃ） ・ミニシアター
第7回 2015年	学生 210 来場者 130 子ども 53	1、2年生 52 ボランティア	・親子での入浴剤作り ・リサイクル工作（おもちゃ） ・ミニシアター・プレイコーナー
第8回 2016年	学生 216 来場者 286 子ども 128	1年生 108 授業 基礎演習Ⅱ	・工作（クリスマス飾り） ・ミニシアター・プレイコーナー ・手作り紙バックのプレゼント
第9回 2017年	学生 231 来場者 320 子ども 156	1年生 126 授業 基礎演習Ⅱ	・工作（クリスマス飾り、カード） ・ミニシアター・プレイコーナー ・手作り紙バックのプレゼント
第10回 2018年	学生 205 来場者 354 子ども 166	1年生 83 授業 基礎演習Ⅱ	・ガラス窓にペインティング ・工作（クリスマス飾り、おもちゃ） ・ミニシアター・プレイコーナー ・手作り紙バックのプレゼント
第11回 2019年	学生 172 来場者 293 子ども 142	1年生 89 授業 基礎演習Ⅱ	・ガラス窓にペインティング ・工作（クリスマス飾り、おもちゃ） ・ミニシアター・プレイコーナー ・手作り紙バックのプレゼント

形態にすることが、学科会議で決定した。また、学生主体の活動であることがより明瞭になるように、「アートワークショップ」実行委員を各ゼミから選出した。この実行委員は、企画の段階から積極的に参加し、読み聞かせの絵本や紙芝居、造形活動内容の選考及び、各委員の受講ゼミでの学生への内容説明等も行っている。これらの学生のアクティブな活動により、参加する子どもの人数が100人を超え、学生は行事に参加することで多くの子どもと関り、「アートワークショップ」は子どもから多くの学びを得られる内容となった。研究対象とした第11回保育フェスタ（2019年）での「アートワークショップ」には、参加学生89人に対して、142人の子ども

の参加があった。

## 2、第11回保育フェスタ「アートワークショップ」について

日時：2019年11月23日（祝）10時～13時30分  
（受付終了13時）

場所：関西女子短期大学 保育実習室、  
短大7号館ホール

保育学科1年生の学生は、グループごとに約1時間半を各コーナーで担当した。各コーナーでは、準備、子どもへの指導や保護者の対応、引継ぎ、片付けを行った（表2）。

表2 第11回保育フェスタ「アートワークショップ」の内容と関わった人数

コーナー内容と主な教材、材料用具	参加者の受け入方	担当学生数（当日参加数）	教員数*
読み聞かせ：大型絵本、紙芝居 折り紙コマや紙バックのプレゼント	1回30分程度3回実施 人数制限なし	26(26)	3
ガラス窓にお絵描き ：水性クレパス	1回30分程度4回実施 人数制限あり	18(17)	2
クリスマスリース：紙皿	随時	24(22)	3
メダル制作：色画用紙	随時	25(24)	3
担当学生数（当日参加）及び教員数合計		93(89)	11

\*ここに挙げる専任教員以外に非常勤講師、事務職員各1人も携わった。

教員のサポートの下ではあるが、学生各々が「アートワークショップ」を楽しみにやってきた子どもたちや付き添いの保護者に積極的に関わった。子どもが、遊びや読み聞かせ、ガラス窓や透明パネルでのお絵描き、クリスマスリースやメダル作りを楽しめるように指導し、サポートした。開催時間終了後は各コーナーの教材、材料用具、会場全体の片付けを 1 年生全員で行った。

### 3. 「アートワークショップ」に関連する授業について

「アートワークショップ」は、保育学科 1 年生の秋学期の「基礎演習Ⅱ」の授業として行われ、同じ 1 年生の秋学期の授業「造形表現Ⅰ」においても、そのシラバスの中で、行事の教育的意味について示している。

1 年生必修科目のゼミ授業「基礎演習Ⅱ」では、保育者に求められる主体性と協働性の向上を図るために、学科行事やゼミ活動に積極的に参加し、保育が同僚とのチームワークで成り立つ仕事であることを体験的に学ぶとともに、実習時に必要とされる社会人としてのマナーやスキルを身につけることが求められている。この「基礎演習Ⅱ」では、「アートワークショップ」に関する授業を 15 回中の 4 回で行い、実行委員を中心に、ゼミの仲間同士が協力して、幼児に相応しい造形活動や読み聞かせの教材や指導方法について考え、当日使用する教材、用具やプレゼント作品を準備した。また、来場する子どもや保護者が楽しく過ごせるように、マナーや身だしなみについて話し合う時間もとり、「アートワークショップ」後には、体験したことについての振り返りを行った。

シラバスに掲載がある保育内容演習の「造形表現Ⅰ」は、幼稚園教諭免許状、保育士資格取得のための必修科目で、講義や作品制作の授業を通して、子どもの造形表現を指導援助する力を身につけることを目的としている。この授業では、幼児の造形表現指導のために、“もの”としての材料用具の扱い方に慣れ、その特質や効果を理解することが求められている。学生は、秋学期に開講されるこの授業で、実技や講義、幼児の造形活動に関する動画の視聴等で「アートワークショップ」実施前に、粘土や紙で“つくる”造形表現の指導について学修する。それに先立つ春学期には、シラバスに「アートワークショップ」については記載されていないが、同じく必修科目である「幼児造形」の授業で、主に“かく”造形表現について、保育現場で使用される様々な描画用具材料を扱い、自身の実技体験を幼児期の子どもの活動に結びつけて振り返り、ファイルにまとめるという授業を行っている。このことから、「アートワークショップ」実施前には、学生が幼児の造形表現とその指導につい

て、春・秋学期を通して一通り学んでいると言える。「アートワークショップ」後の「造形表現Ⅰ」の授業では、幼児の造形指導に必要な保育者の資質・能力についての考えを深め、また 2 か月後の学外実習で活かすことを目的に、体験の振り返を行っている。

## IV. 研究方法

1、対象者：本学保育学科 1 年生 93 名

2、調査方法：調査①「アートワークショップ」の開催前後の「造形表現Ⅰ」の授業において、「乳幼児が造形表現を楽しみ、それによって豊かな感性や表現力、創造性を育むために、未来の保育者としてあなたはどのような事を学んでおきたいと思いますか？」という質問を行い、その自由記述の回答を、アートワークショップの事前事後で比較、検討した（表 3）。

事前事後の記述を比較し、事後の記述に、造形表現の計画、指導援助に重要と著者が考えるキーワード（年齢、環境構成、興味、導入、援助、発達、発想、想像力、創造性、寄り添う、言葉掛け、楽しい等）が事前の記述より増加した回答と、事前回答とは別の観点から考えることができた回答を調べ、考察した。

調査②「アートワークショップ」当日終了後、保育フェスタ造形作品展という行事を通して感じたことや考えたことを「アートワークショップの計画や準備をし、会場で子どもたちや保護者と関わってみて」という視点で自由記述した回答を、①「関わること」、②「幼児の表現と指導」、③「学びの機会」、④「仲間との協力」の大きく 4 つのカテゴリーに抽出し、セグメント・コード化して分析した（表 4、表 5、表 6、表 7）。すなわち、カテゴリー①を a. 子どもへの積極的な関わりと子どもの反応、b. 保護者からの感謝、c. 保護者への対応、d. 保護者の姿の 4 コードに、カテゴリー②を a. 一生懸命な子どもの姿、b. 一人一人違う子どもの姿、c. 事前準備、d. 教材研究、e. 指導援助の 5 コードに、カテゴリー③を a. 直接体験、b. 次への意欲、c. 課題の 3 コードに、カテゴリー④を 協力の 1 コードとした。

### 3. 倫理的配慮

調査開始前には、調査対象の学生に口頭で研究目的、データの取り扱い方、分析過程において個人が特定されない配慮を行う等の説明を行い、同意を得た。回答内容は授業で受講生全体での振り返りにも使用するが、調査への不参加、回答内容は、成績に影響がないことも伝えた。なお、本研究は関西福祉科学大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施したものである（承認番号 21-04）。

## V、結果と考察

「アートワークショップ」の前後における「造形表現 I」の授業において、乳幼児の造形表現指導について学んでおきたい事を質問した調査①に事前事後両方とも回答した学生は、全受講生 93 人中 61 人であった（回答率 66%）。事前事後の記述を比較し、事後の記述に、造形表現の計画、指導援助に重要と著者が考えるキーワード（年齢、環境構成、興味、導入、援助、発達、発想、想像力、創造性、寄り添う、言葉掛け、楽しい等）が事前の記述より増加した回答、及び事前回答とは別の観点から考えることができた回答が、61 例中 52 例（85.2%）で見られた。表 3 に示したキーワードの増加は、授業で得た漠然としていた知識や技能が、「アートワークショップ」で子どもと活動を通してふれあう体験をすることで、授業で修得していた用語が学生自身の体感した物事として結びつき、より具体性を帯び文章に表現されたと捉えることができる。事前に学生③が学びたいこととして挙げた回答「日常の生活の中で子供には身の周りの物がどのように見えているのか、どのように感じているのかを知る」が、事後には造形表現が苦手な子どもの存在を意識した回答になった例がある。このように事後に違う観点がもてたのは、学生が指導援助を実際に体験したことで、更に造形表現の指導援助に必要な知識や技能に気づくに至ったものと考えられる。

調査②の「アートワークショップ」終了直後の質問紙には、当日参加した学生全員 89 人の回答があった。この回答の文章をセグメント化し、コーディングした結果 207 例が得られ、その中から学生の体験したことを視点にカテゴリー名をつけて分類し、分析した（表 4、表 5、表 6、表 7）。

子どもや保護者と「関わること」から、学生が感じたことの回答の例を表 4 に示す。学生の回答「たくさんの子どもたちとかがわることができ、楽しく会話したり対応などすることができた」「子ども達が作った作品に“すごい”とかなど言ったらニコツとしてくれた」等の感想からは、学生が、かいたり、つくったり、読み聞かせをしたりする「アート表現」の活動を仲立ちとして、子どもと関わり、共感することができた体験となったことがわかる。「保護者の方にも沢山お礼をして頂いたので楽しかった」等の感想からは、自分が他者から認められた喜びを感じる体験であったことも窺える。まだ実習での指導経験がない学生の多くは、自分の関りがどのように受け止められるのか、不安な気持ちでいたと思われる。学生が子どもに作り方を伝えたり、手伝ったり、お話を読み聞かせたりすることで、作品が出来上がったたり、子どもが楽しそうにしたりする結果が生まれ、喜ぶ子どもの姿や保護者の感謝の言葉から、関わることへの自信が芽生え、人と関る仕事である保育者として、子どもや保護者に積極的に関わろうとする意欲や、上手に関われそうだという期待がもてたのではないかと考える。また、学生の保護者に関する回答には、「保護者の方はとても良い方が多く、とても話しやすいと思いました」等の感想があり、笑顔で、温かい保護者の姿を間近にし、将来就職先で保育のパートナーとして関わる保護者の存在に安心感を抱いていると推測される。

「幼児の表現と指導」に関する学生からの回答例を表 5 に示す。「必死に作っていて」、「好きな色など 1 人 1 人違い、子どもの感性に身近にふれることができた」等の回答からは、学生が、子どもがかいたり、つくったり、聞いたりすることに一生懸命になることや、一人ひとり違う表現をすること等、幼児の表現する姿を直接観

表 3 アートワークショップ事前事後における学生の回答記述例

事前の回答記述	事後の回答記述
①子供たちの年齢にあった造形活動をできるように学んで行きたいと思います！ (1)	①子ども達が自ら進んで制作できるような環境を作り、子供たちの想像力豊かな発想が表現できるような事を学びたいです。 (3)
②どのようにすると、子どもたちに分かるように造形ができるのかを学びたいです。 (0)	②子どもたちにどのように伝えれば、表現力や創造性が育むのかを学びたいです。 (2)
③日々の生活の中で子供には身の周りの物がどのように見えているのか、どのように感じているのかを知る。 (3)	③大人の考えを押し付けない、無理のない活動になるような造形表現が苦手な子どもも楽しく参加出来るような造形活動をたくさん学んでおきたい。 (1)
④子どもの個性が引き出せるような沢山の技法をもっと知って、学んで、子どもたちにも楽しんでもらえるようなことを学んでいきたいです。 (3)	④子どもが楽しみながら学び、造形表現を通して子どもたちが成長できるような導入の仕方や、援助を学びたいです。 (4)
⑤どんな内容でどんな工夫をすれば表現力が育つのか知りたいです。 (2)	⑤子どもの発想力や表現力を育てるためにどんな声かけや対応をすれば良いのか学びたいです。 (4)

\*括弧内はキーワード数

表 4 保育者として自信に繋がる体験

カテゴリー	コード名	回答例 (88) *
関わること	子どもへの積極的な関わりと子どもの反応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・たくさんの子どもたちとかわることができ、楽しく会話したり対応などすることができた</li> <li>・子どもたちに声をかけることでみんなも話してくれたので、自分から声を掛けたのが良かった</li> <li>・「こうやってね」と言うと言進んで作ってくれたり</li> <li>・聞くとみんなちゃんと答えてくれてうれしい</li> <li>・子ども達が作った作品に“すごい”とかなど言ったらニコッてしてくれたり</li> <li>・出来て喜んだ顔と一緒に作って良かった</li> <li>・積極的に関わり、子どもたちも喜んで楽しんできた</li> <li>・ほめると、更に子どもから話しかけてくれて</li> <li>・どういう声掛けをしたら分かりやすく伝わるかを考えながら関わりました</li> <li>・目を合わせたり、もっと笑顔でしてあげると少し興味を示してくれて</li> <li>・自分から話しかけることで子どもの緊張もほぐれていくことを実感し</li> </ul>
	保護者からの感謝	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者の方にも沢山お礼をして頂いたのが楽しかった</li> <li>・保護者の方から「ありがとう」といってもらいうれしかた</li> <li>・保護者の些細な一言を聞く度に嬉しく頑張ろうと思え</li> <li>・それだけ頼りにされていると実感しました。</li> <li>・保護者の方も、優しくありがとうと～サポートして下さい</li> </ul>
	保護者への対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者とかわるときは緊張していましたが、受け取ってくれ</li> <li>・保護者の方とも子どもを通してのお話が出来て</li> <li>・保護者対応は少し緊張していたけど思った以上にスムーズにできて良かった</li> <li>・保護者の方が笑顔だったのが印象的</li> <li>・親の目が温かく非常にいい体験</li> <li>・保護者の方はとても良い方が多く、とても話しやすかったです。</li> </ul>
	保護者の姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者の方も子ども達のできあがった物を見て、喜んでくれたのでよかった</li> <li>・保護者さんたちが喜んでいて私も気持ちいい</li> </ul>

\* 括弧内の数字は全回答数

察し、理解を深めたことがわかる。また「子どもたちが楽しそうにしている大変だったことは忘れてしまいました」、「子どもたちの年齢によって説明の仕方が少し難しかった」、「年齢がバラバラだったので一人ひとりに合った援助の仕方に戸惑う」等の回答からは、事前の材料準備や教材研究が大切であること、指導や援助は子どもや状況に合わせた工夫が必要であること等、幼児の表現を指導するにあたって理解しておくべき知識や技能に気づく体験をしたことが窺える。保育教諭養成課程研究会が示す、保育内容「表現 A (B)」の指導法のモデルカリキュラムの到達目標<sup>8)</sup>に「幼児の心情、認識、思考及び動き等を視野に入れた保育の構想の重要性を理解している」とある。学生は、直接関わる子どもの発話やつぶやき、表情やしぐさから、かいたり、つくったり、絵本や紙芝居を楽しんだりしている過程で、子どもの心が動き思考していることを感じとっている。「アートワークショップ」での子どもとの直接体験によって、子どもの心情や認識、思考や動き等を視野に入れるということは、どのようなことなのかをイメージできたのではないかと推測される。

さらに、来場する子どもを 200 人と想定した事前の準備には負担感をもっていたが、指導する前に子どもが楽しく安全に活動できるよう教材研究や十分な数の材料準備をしたことで、実践当日には子どもや保護者から喜ば

れることに繋がり、達成感を感じたことがわかる感想が多い。またそれぞれの子どもたちに楽しく過ごしてもらおうと、自ら指導援助を試行錯誤することで、その難しさを実感している。保育における表現活動は、子どもが活動に集中し、没頭している過程の重要性や、子ども一人ひとりの発達や興味関心の違いを理解した上で、計画実践されるべきである。学生は、年齢や個性の多様な子どもたちとふれあい、子どもを楽しませたいという思いから、子どもを観察し関わり方を試した。この積極的な関りが、幼児に「アート表現」を指導するにあたって学ぶべき事項を、学生自身が気づく契機になったと考えられる。

「学びの機会」に関する学生の回答例を表 6 に示す。「直接子どもと関わることでたいおうなどに新たな発見がたくさんありました」、「今回の経験は、将来の私にとっても役に立つことだと思う」、「人に説明できるように練習しようと思いました」等の回答からは、「アートワークショップ」での体験が実習や就職で役に立つと思えたり、「次も挑戦したい」という意欲に繋がったり、自ら保育を学ぶ上での課題に気づいたりしていることが分かる。学生は保育者になりきり、子どもや保護者と直接関わることで、授業で得た知識や技能を試すことができたのである。試行錯誤した結果、自分の理想とする姿と今の自分の力量を比較し、これから学ぶべき自分なりの課

表5 アート表現を指導するにあたっての知識や技能に気づく体験

カテゴリー	コード名	回答例 (91) *
幼児の表現と指導	一生懸命な子どもの姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必死に作っていて</li> <li>・子どもたちが一生懸命作っている姿を近くで見られてとても良い経験</li> <li>・みんな楽しそうに色々な絵を書いていて</li> <li>・子どもたちが絵を描いている様子が、みんなイキイキと描いていて笑顔で「みてみて、出来た」</li> <li>・子どもたちが楽しそうに絵を書いていて</li> <li>・小さくてできないと思っていた子にも声をかけて～自分で作ったメダルをうれしそうに持って帰った</li> </ul>
	1人1人違う子どもの姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きな色など1人1人違い、子どもの感性に身近にふれることができた</li> <li>・描く絵も子どもの世界はすごい～1人1人個性があり</li> <li>・一人ひとり作る順番も違えば、書く順番も違い個性が出ていた</li> <li>・書きたい物がある子とない子がいました</li> <li>・子どもたちによって出来るレベルが様々で</li> </ul>
	事前準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちが楽しそうにしているで大変だったことは忘れてしまいました</li> <li>・子どもたちが楽しそうに作ってくれているところを見て、頑張っってよかったな</li> <li>・楽しそうで時間が過ぎても夢中になっていて準備をしてよかったな</li> <li>・子どもたちが身に付けてくれて嬉しくて頑張っって作って良かったな</li> <li>・こんなに楽しんで作ってもらえるものと考えてよかった</li> </ul>
	教材研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども達が分かりやすいように、～はりがでないように工夫したりして考える</li> <li>・子どもたちが作りやすいものを考えました</li> <li>・準備の段階で子どもたちがどうすれば楽しめるのかをよく考えておく</li> <li>・子どもたちが怪我せずに楽しく作ることが出来るか考えながら～した</li> <li>・作品をどのようにつくるのかというのにたくさんのことを考えた</li> </ul>
	指導援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちの年齢によって説明の仕方が少し難しかった</li> <li>・小さい子どもに説明するのは、少し工夫して</li> <li>・作り方を説明するのがとても難しかった。言葉の伝え方</li> <li>・説明をするときどういう風に言うのとつたわるのか不安だった</li> <li>・子どもに分かりやすく教えるのが難しい</li> <li>・子どもたちに作り方を説明する時にわかりやすくつたえることが難しかった</li> <li>・作品を創る過程を簡単に分かりやすく伝えるということの難しさ</li> <li>・年齢がバラバラだったので一人ひとりに合った援助の仕方に戸惑う</li> <li>・年齢やその子の性格によってそれぞれ違うものができることに気付いた</li> <li>・一度に複数の子どもの話をするのは難しい</li> <li>・一気に何人もの子ども～説明するのが大変・元々作っていた子と新しく来た子の対応を一緒にするのが大変</li> <li>・途中～参加してきた子どもの対応が難しい</li> <li>・子供達と一緒に作って～子供達の接し方をあらためて学ぶことができました。</li> <li>・子どもたちまで声が届くように、感情を込めて読むことが難しかった</li> <li>・大きい声で読まない子どもたちに伝わらない</li> <li>・手遊びも分かりやすいようにおおきく動くことが大切</li> </ul>

\*括弧内の数字は全回答数

表6 学修体験の理解

カテゴリー	コード名	回答例 (22) *
学びの機会	直接体験	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたち自分自身とても楽しみながら関わらせていただき</li> <li>・実際に作る姿をまじかで見ることができて</li> <li>・直接子どもと関わることでたいおうなど新たな発見がたくさんありました。</li> <li>・子供たちと関わることはとても楽しくて、新しい発見を見ることができる</li> </ul>
	次への意欲	<ul style="list-style-type: none"> <li>・来年もあれば今日みたいに言ってもらえるように頑張りたい</li> <li>・これからたくさんの人と関わっていききたい</li> <li>・今回の経験は、将来の私にとっても役に立つことだと思う</li> <li>・この経験を活かして実習やこれからの授業で活かしたい</li> <li>・子どもの関り方などたくさんを学ぶことができました。～これからの活かしていきたい</li> </ul>
	課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人に説明できるように練習しようと思いました。</li> <li>・普段私たちが話している言葉ではなしていたのが反省しないといけない</li> <li>・（保護者の方とのコミュニケーションに）少しずつ慣れていけるようにしたい</li> <li>・保護者への方への関り方がわからなくて、戸惑うことがあり自分の勉強不足だと感じました</li> </ul>

\*括弧内の数字は全回答数

表 7 仲間と協力する体験

カテゴリー	コード名	回答例 (6) *
仲間との協力	協力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなで協力して楽しい雰囲気です</li> <li>・一人では無理だったの何人かとすばやく協力しなければならなかったです。</li> <li>・子どもたちにどのような活動をしたか楽しんでくれるか皆で考えた、準備をしている中、みなで協力しあって</li> <li>・ゼミのみんなで協力でき</li> <li>・みんなそれぞれの意見があり、それをふまえていいワークショップが出来上がったと思います</li> <li>・協力して子どもと接することができ</li> </ul>

\* 括弧内の数字は全回答数

題を見つける機会となったと考えられる。

「仲間との協力」に分類した回答例を表 7 に示す。「一人では無理だったので何人かとすばやく協力しなければならなかったです」、「子どもたちにどのような活動したり（すれば）たのしんでくれるか皆で考えた」（学生の文中のカッコ内は、著者の解釈）等の回答からは、子どもたちのために「アートワークショップ」を成功させようと、ゼミの仲間同士で、各自の役割を果たしながら協力して課題を解決し、そのことに対して達成感を感じたことが読み取れる。

## VI. まとめ

「アートワークショップ」終了直後の学生の回答記述からは、造形活動や読み聞かせの活動を仲立ちとして、試行錯誤しながら意欲的に子どもや保護者に関わる学生の姿が明らかになった。地域の子どものために開催してきたこの行事は、学生にとって受け身に学ぶだけでは得られない学修の機会であると言える。

学生が仲間と取り組み、実践する行事「アートワークショップ」では、「仲間と協力」し「関わること」を通して、保育者としてのスキルやマナーを身につけるという「基礎演習Ⅱ」の授業目標を達成することができた。

また「アート表現を指導するにあたっての知識や技能に気づく体験」となる行事「アートワークショップ」は、子どもの主体的な造形表現活動のための指導援助に活かす力を身につけることを目的とする保育内容の「造形表現Ⅰ」の授業を補完し、学生の学びの質の向上に資すると言える。現役の保育士を対象とした佐藤の研究<sup>9)</sup>によると、保育者養成校での造形教育の学びとして、園や地域、子どもと関わる機会をもつ等の実習や、ボランティア等の実践的な学びも重要であると報告されている。授業「造形表現Ⅰ」での「アートワークショップ」後に行った質問への回答「学生の学修したいこと」がより具体的になっているという結果からも、地域連携行事「子どものためのアートワークショップ」に学生が主体的に関与し子どもと直接関わることで、造形表現の指導援助に関する知識や技能が深まったことが推測される。

しかし、短期間の体験の教育効果は一過性となる場合もある。今後の課題として、調査研究をさらに継続して行い、行事「アートワークショップ」において「アート表現」の活動を仲立ちとする学生の子どもと直接関わる体験の教育効果が、より持続する行事や授業のあり方について検討していきたい。

## 謝辞

本研究は、令和元年度関西女子短期大学奨励研究費の助成によるものであり、ここに記して感謝の意を表します。

## 参考文献 引文文献

- 1) 矢野喜夫：子どものころの遊び・子どもとの遊び、石川県立大学年報 2014、p.66-74、2015。
- 2) 無藤隆代表 保育教諭養成課程研究会：『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～』、萌文書林、p.22、2017。
- 3) 長沼貴美、佐藤美香：保育園体験実習が大学生の子どもに対するイメージ及び学習意欲に及ぼす影響、創大教育研究、26：65-74、2016。
- 4) 文部科学省：「幼稚園教育要領解説」、フレーベル館、p.245、2017。
- 5) 文部科学省：「幼稚園教育要領」、フレーベル館、p.20、2018。
- 6) 中央教育審議会：「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」、文部科学省 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm) (2012-8-28)
- 7) 中央教育審議会：「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～ (答申)」文部科学省 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm) (2015-12-21)
- 8) 無藤隆代表 保育教諭養成課程研究会：『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～』萌文書林、p.76、p.79、2017。
- 9) 佐藤絵里子：保育現場が求める日本の保育者養成校における造形教育の学びと課題に関する考察－グループ・インタビューに基づく質的分析および質問紙調査による量的検証から－、美術教育学、39：p 141-153、2018。